

第一章

——王城の門近くに設えられた広場。

そこで開催されているトーナメントに出場している俺の兄貴——オリヴィエと、騎士団長の最終決戦が行われている真つ最中。

俺と婚約者の彼女は、城のバルコニーからその様子を見守っていた。

キンッ！

オリヴィエがしなやかな身のこなしで剣を振るい、とどめの一撃を喰らわせる。

騎士団長が持っていた剣が銀色の軌跡を描いて宙を舞い、切っ先からドッ！と土にめり込んだ。

「勝者、オリヴィエ・ド・ゴール王太子殿下！」

審判が声高らかに宣言する。

闘技場の観客席からは雷のような拍手と、鼓膜を震わせるような歓声が響き渡った。

オリヴィエは剣を引き、力尽きて膝をついた騎士団長へ向けて手を差し出す。

彼がその手を取ると力強く引き起こし、互いに肩を叩き合って健闘を称えている。

そんな彼らへ、観衆から温かい拍手が巻き起こった。

まるで絵に描いたような感動的なシーンの演出。

いかにも兄貴らしい、そつのない対応だ。

「すごい……！ オリヴィエ様つてお強いんですね！ しかも負かした相手を称えるなんて……騎士道精神にあふれてる……！」

初めて兄貴の試合を見たらしい彼女は、バルコニーの手すりに手をかけて身を乗り出し、目をキラキラと輝かせて兄貴に見惚れている。

（俺にはこんな顔、見せてくれないクセに）

なーんて内心毒づいてしまう。さつきからずっと、イライラしっぱなしだ。

せつかく、彼女と二人きりになれたっていうのに。

そりゃ兄貴が試合に出てるんだから、彼女が夢中になって当たり前なんだけど。

歓声の中、彼女の視線に気づいた兄貴が彼女を捉え——そつと唇に指を当てて小さく投げキッスをしてみせる。

「……っ♡」

彼女の頬がぽつと染まる。恐らくオリヴィエの送ったサインに気づ

いたのは、彼女と俺ぐらいだろう。

「も……もう……オリヴィエ様つたら……♡」

もじもじしながら自分の唇に指を当てる彼女。

乙女じみたその仕草に、やけに苛立ちを覚えて——俺は彼女の腰を抱いてバルコニーの手すりから引き離す。

「……っ!? リ、リシャル？ まだ閉会式が残って……」

「いいから、行くぞ」

「えっ、あつ……」

おろおろと闘技場に視線を向けたままの彼女を連れ、強引にバルコニーから出て場内へ戻る。

観客に向けて雄々しく剣を掲げて歓声に応えるオリヴィエが、小さく遠ざかっていった。

俺の部屋へ彼女を連れ込み、肩を押さえ付けるようにしてベッドへ座らせる。

「王族が閉会式をエスケープするなんて……また側近に叱られますよ」

「俺が式典サボるなんて、今に始まったことじゃねーし。あつちだつて諦めてんだろ」

「で、でも……せつかくのオリヴィエ様の晴れ舞台が……んっ……♡」

「後で祝つてやりやいいだろ？ 今は兄貴の話禁止な」

靴とストッキングを丁寧に脱がせて、裸になった爪先へキスする。たったそれだけでもう、彼女はぴくんと肩を震わせて甘い吐息を漏ら

す。

「あ……っ♡」

「っは……♡もう発情してんじやん。アンタだって期待してたんだろ？」

「そんな……ことっ……♡な……あん……っ♡」

爪先から足首、ふくらはぎへと唇を這わせ、押しつけてすり……♡と撫で上げる。

俺と兄貴によつて全身性感帯に仕上げられた彼女にとっては、こんな前戯すら秘所を愛撫されているのに等しい。

かりっ……♡

軽くつねるように内腿を噛んでやると、「ひうんっ♡」と小刻みに尻たぶを震わせた。

赤い跡が、刻印のように残る。

（兄貴がコレ見たら、どんな顔するかな）

どうせ今夜はトーナメント優勝の余韻に浸った兄貴が、彼女の耳に睦言を流し込みながら一晩中ハメ倒すに違いない。

……だからこそ、今わざとこんなことしてるんだけど。

ドレスの裾をめくり上げ、顎を持ち上げて付け根に唇をつけて往復させる。

ヒクつきがより強くなり、おまんこを差し出すようにくんっ♡と腰が持ち上がってぶるっ♡と震えた。

「ハハ……自分から舐めてほしくって催促してんじゃん？」

足をくつと開かせて股間に顔を埋める。

そこにあるのは、穴あきショーツから恥ずかしげに顔を出した、肥

大クリトリス。

もはやクリトリスと呼ぶには大きすぎるそれは、有名画家に直筆で描かせたというラナンキュラスの絵がでかど入った柔らかいグムのような素材のケースに恭しく収まっている。

兄貴が彼女のために、特別に作らせた世界で一つだけの美しいクリちんぽケース。

それを見ているとやけに苛立つて、噛みついて引き抜いてやった。

「お……うんっ……♡」

俺の歯が当たったのか、彼女が仰け反って野太い声を上げる。

「ハハ、何？ クリちんぽケース噛まれて感じちゃった？」

剥き出しになった肉芽をぴんっ♡と弾くとまたもや彼女がびくんっ

♡と腰を震わせる。

「っあ……♡」

「もう根元からぴーんと勃たせちゃってさ。シャブってください♡って自分からアピールしてるようなモンじゃん？」

「そ、そんな……ことお……♡」

ぴんっ♡ぴんっ♡

意地悪く先っぽを弾いてやると、かくっ♡かくっ♡と彼女が浅ましく腰を揺する。

「ひ……あ♡先っぽ……♡弾くのっ……反則……っ♡」

「とか言っちゃって、好きなくせに」

すりい……♡と根元から指腹で裏筋を撫でれば、もうぐちよぬれのまんこがヒクつく。

床にしゃがんだまま上目遣いで彼女を見上げ、甘ったるく囁いてみ

せた。

「ほーら、どうしてほしいのかおねだりしてみな？」

「……っあ……♡」

ぽかあ♡と足を大きく開いて、彼女が蕩けた顔で懇願する。

「わっ……♡私のクリちんぽっ……♡リシャルの口でちゅぽちゅぽしゅぶって……女の子射精、させてほしいです……っ♡」

「よく出来ました……っ♡んじや、お望み通りバキュームフエラでサクッとイカせてやるから」

ぢゅうううううううう♡

根元から吸い付き、パンパンに膨らんだ淫核を咥内でぐちゅぐちゅと揉みしだく。

「いっ♡あっ♡クリちんぽぐちゅぐちゅらめえええ♡お腹にい♡

びりびりくりゅからああ♡」

俺の頭を抱え込んで内ももを引きつらせてヨがる彼女。

触れられただけで軽くイッてしまうくらいに性感帯を開発しつくされた彼女を愛おしく思う。

でも、彼女はどうかいっても俺だけのモノにはならない。

こうして二人きりで愛し合っている最中ですら、兄貴の面影がちらついて。

口の中で跳ねるぷりぷりとした肉芽の芯を、ぷちつと唇で押し潰した。

——隣国より伯爵令嬢である彼女を俺と兄貴の婚約者として迎え入れたのは、半年前のこと。

俺たちは、双子の王太子だ。

この国では双子の王子が産まれた際は、ふたりで王位を継承することになっている。

『あなたがたは二人でひとつ。支え合ってこの国の王となるのです』
幼い頃からそう言い聞かされてきた。

——けれど、実際『王』として期待されていたのは、兄貴の方で。

両親は明らかに兄貴を溺愛していた。

俺は兄貴のオマケとして、いつも周りを笑わせるお調子者として振る舞うしかなかった。

頭脳明晰、温厚篤実、オマケに突出した魔力を持ち、剣技にも優れている。

気品溢れる振る舞いをし、常に民のことを考えて動けるような、ま

さに王になるために生まれてきたような人間。

刹那主義で遊ぶことしか考えてない俺なんか、足元にも及ばない。

でも、それでいいと思っていた。

人には生まれつきの資質がある。

兄貴には王の資質が備わっていて、俺にはそれがなかっただけのこと。

だから俺は、『兄貴のオマケ』として生きていくしかない。ヘラヘラ笑って道化に徹すればいい。

それに俺は完全な『役立たず』でもない。

「殿下は常に道化の仮面を被っていらつしやる。それは外交で非常に効力を発揮しますよ」

俺たちに政治や帝王学を教えてくれていた教育係は、ガザアナ幼い俺をそんな風に褒めてくれた。

（俺にもイイとこあったんだな）

なんて、嬉しくなったものだ。だからますますお調子者に磨きがかかってしまったのだが。

高望みなんてせず、俺は俺の役割を果たせば良い。

——そう、思っていたのに。

彼女に、出会ってしまったのだ。

セックスが何より尊ばれるこの世界では、王族や貴族の子女は正しいセックスを学ぶため、年頃になったら学園に入学し婚約者と共にセックスに励むのが習わしとされている。

俺たちは国際交流もかねて、名門と名高い隣国の学園へ留学した。

彼女が婚約破棄の宣言をされた場面に出くわした俺と兄貴は、彼女へ同時に結婚を申し込んだ。

相手の男のあまりの言い草に腹が立つたのと、公衆の面前で恥をかかされている彼女を見ていられなくてつい勢いで——というのもあったのだが。

窮地に立たされている真つ最中だというのに彼女の口元は僅かに綻んでいて。まるで夢の中にいるような顔をしていて。

やけに、惹きつけられたのだ。

……兄貴は、もともと彼女を知っていたみたいだけど。

そして、学園の教師であるクロフォード先生の取り計らいで、俺た

ち二人が交互に彼女を抱き、どちらか相性がマッチする方を選んでもらうという、【セックスバトル】を行う運びとなった。

その結果、どちらも選べないという答えを突きつけられて、俺たち二人で彼女を娶ることになったのだった。

俺の両親である国王夫妻は、彼女を歓待した。

彼女はすぐに両親と仲良くなり、側近たちや使用人にも分け隔て無く接する。

おかげで何の反発もなく、俺たちの未来の妻として迎え入れられた。時折俺や兄貴の公務にも同伴し、国民たちからも認知されつつある。俺と兄貴はお互いに彼女を尊重し大切にしているし、彼女も俺たち二人を平等に愛してくれている。

すべて順風満帆、事も無しだ。

——表向きは。

「つ……ああ……つ♡やつ……はああ……つ♡」

れろお♡♡じゅっぽ♡♡じゅっぽ♡♡じゅっぽ♡♡

先っぽをチロチロと舌で突き、口を窄めて芯が硬くなつて真っ赤に熟れた肉芽をぢゅっぽぢゅっぽ♡と根元から強く吸い上げる。

「い……っ♡ああ……♡クリちゃんぽフェラああ♡らめええ♡これええ♡頭ばかににやるからああ♡♡」

「ハハ、どーせ夜も兄貴にココ、責められるんだもんなあ。嬉しいだろ、一日二回もシャブってもらえて」

「やああ……♡なんれっ♡そんなこと言うのお♡」

一刻も早くイキたくてたまらないのか、ドレスごしに片手で乳首を
弄り始めた。

「あーもう、こら。チクニー禁止っ」

「だって……だってえええ……おっぱいがっ、せつないんだものっ

……♡」

「つたく、しょうがねえなあ……弄ってやるから」

彼女の手をどけさせて、乳首を軽く引っ搔いてやる。

かりっ♡かりっ♡

ぬるつぬるのクリを舌で舐め転がしながら乳首を引っ搔くと、彼女は満足したのか唇を半開きにし、だらしなくばかあ♡と足を開いて腰を突き出す。

快感を逃がそうと力をこめた指先が、俺の髪をくしゃくしゃに乱し

て。

もうおまんこからはダラダラとエロい汁が垂れ流しで、白垂の床にぽたぽたと雫が落ちている。

「まんこもケツまんこもヒクついてんな♡どっちも弄って欲しいんじゃないか？」

「ふぁ……は……♡い、今っ♡弄られたらぁ……♡最後まで、したくなっちゃう、のでえ……♡」

「俺はチンポハメるつもりで、ここに来ただけど？」

「だ、だつてっ……今日はっ……オリヴィエ様との……日……なのにっ……♡最後までするのは……っ♡」

腹の底がもやつとして、苛立ちがとぐろを巻く。

「ハッ……ここまですってハメなかつたら無罪です♡なんて言い

訳するつもりか？」

「だ……だってっ……約束……破るのは……ダメ……ですよ……っ

♡」

「決まりは破るためにあるんだぜ？ どーせ兄貴とも、俺に隠れてやつてんだろ？」

「オリヴィエ様は……ちゃんと、約束まもっ……や……あゝ……」

……ッ♡」

ぐに♡

クリに舌を這わせながら、アナルとまんこ、両方に浅く指を差し入れる。

三点責めは、彼女が一番好きな愛され方だ。

兄貴は絶対アナルに触れたりしない。

だからこそ、俺はセックスバトル中から彼女の菊座を徹底的に開発してやった。

兄貴が踏み込まない聖域を、彼女の中に作りたかったから。

（あんなご立派なクリちんぽケースをつけさせといて、約束守ってるもクソもねーだろ）

もし、他の人間が彼女の股間を拝む機会があれば。

あの特注クリちんぽケースを一目見ただけで、彼女が兄貴のモノなんだと瞬時に理解するだろう。

てらいもなくそういうコトをするのが、オリヴィエという男だ。

そしてその無邪気さと傲慢さが吐き気がするほど妬ましい。

『彼女は僕たち二人の妻になる女性だからね。平等に彼女を愛せるよ

うルールを作ろう』

そう提案してきたのは兄貴だった。

日を定めて、俺たちそれぞれが個別で彼女と交わる日を設けること。絆を深めるために、三人で交わる日を週一日設けること。

抜け駆けはけつしてしないこと。

兄貴はわざわざ書類をしたためて、笑顔で俺と彼女に差し出してきた。

これが牽制だつてことくらい、頭が悪い俺でもすぐに分かる。兄貴は俺に彼女を奪われることを怖れている。

そして——自分が彼女を独り占めするのに、優位に立っていることも。

ぢゅぷっ……♡ぐちゅぐちゅっ♡

ほどけた菊座の中に差し入れた指を折り曲げ、ぞり♡ぞり♡と皺を伸ばすように撫でる。

膣襞に面した壁を擦られ、膣襞とアナルが同時にきゅくゅ……♡と窄まって指を喰い締める。

「い……っ♡はっ♡おしりいい♡弄りすぎっ……♡またっ♡あながっ♡広がっちゃうう……♡」

「もう手遅れじゃね？ 俺のちんぽでさんざんほじられてるんだし」

「また……っ♡そんなこと言って……♡あっ♡んああ♡」

ぞりいい♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡ぐっちゅ♡

手のひらをぐっ♡と彼女の股間に押しつけ、折り曲げた指でぽって

り♡膨らんだ肉天井を小刻みに揺する。

俺の手に突き動かされるように腰が激しく揺れ、ぎゅむっ♡ぎゅむっ♡と膣壁が緊縮し指を噛みちぎらんばかりの勢いで食い締める。

「おおおおお………ッ♡Gスポぐりぐりいいいい♡らめええ♡きちやうう♡もうアクメの予感きちやうからああああ♡」

「こーら、大声出すなよ。兄貴が通ったらどうすんだ？」

「らっっ♡らっっっえええ♡」

止めとばかりにぐりい♡とうねる肛壁を押し込む。

括約筋がぎゅ♡と締まり、がつくん♡と大きく腰が持ち上がった。

「っ♡おほおおお♡んお♡おっ♡おっ♡おっ♡らめっ♡おひりぐりぐりらめっ♡」

「おら、イクときはちゃんと俺に教えろ。ルールは守らないとダメだ

立ち上がり、ぱかあ♡と開いた彼女の腿を抱え上げて自分の股間に押しつける。

ズボンの中でぱんっぱんに膨らんで苦しげにどくん♡どくん♡と脈打つ肉根の鼓動を味わわされた腔口が、じわあ……と蜜で潤んでズボンを濡らす。

「で……でも……っ……」

彼女が遠慮がちに腰を引く。兄貴との『約束』を破ることをおそれているのだろう。

「したい……だろ？」

強く尻を掴んで引き寄せ、ダメ押しに耳たぶをかりつと囁んでやる。

「………ッ♡」

びっくん♡と肩を竦ませ、彼女が吐息を零した。

「……さい……ていつ……♡」

ぞくん♡とうなじが甘く痺れる。

だってそんな言葉、兄貴にはけっして投げつけないだろうから。

「……知ってる」

耳元で低く囁くと、腰を引いてズボンを脱ぎ始めた。

兄貴と彼女を奪い合うなんて思ってもみなかった。

でも、セックスバトルが始まった時はたいして本気じゃなかった。

勢いで婚約を申し込んでみたものの、本当にするかどうかなんて考えてなかった。

お祭りのなもので、万が一俺が勝っちゃったら、お茶を濁してなかったことしようなんてふざけたこと考えてたりした。

もうホンット、あの時の俺を殴りたいけど、カッコつけて飛び出た俺をよくぞやってくれたと褒め称えたい気持ちもある。

あんな状況でもなければ、俺は彼女と交わることもなんてなかったらうから。

——いつかは俺もしかるべき令嬢を妻に迎えることになる。

それまでは好き放題女の子と遊ぶつもりで、留学を決めた。

面倒は避けたかったから、学園を卒業するまでのモラトリウムだと割り切っている相手を選んでセックスしていた。

女の子達は可愛い。気まぐれで甘えん坊で、無邪気に「大好き♡」って俺にすがりついてくる。

校内を歩くと投げかけられる声援も、憧れと性欲が入り交じった眼

差しも、全部愛しい。

けれど。

どこまでも『道化』の仮面を被り続ける俺は、誰のことも愛せなかった。

だって本当の俺なんて、誰も見たくないだろうから。

兄貴への劣等感でいっぱい、卑屈で、でも兄貴を越えてやろうなんて気概もない、情けない俺。

そんな本性を少しでもちらつかせたら、きっと皆失望する。俺から去って行く。

だからめいっぱい虚勢を張って、道化を演じきろうって思っていたのに。

なぜだか彼女の前では誰にも見せたくないと思っていた本音を、さ
らけ出すことが出来た。

彼女も婚約破棄された身の上だというのもあるし、セックスバトル
が終わるまでの短いつきあいだと割り切っていたのもあるのか。

ともかくなんとなく気安くなって、本心をつい吐露してしまったの
だ。

「兄貴の方が人格も成績も魔術の腕も上。俺たちは二人で王位を継ぐ
予定だけど……兄貴一人でも十分とかみんな言ってる。俺は要らない
子ってヤツなんだな」

口にした瞬間後悔した。何言ってんだ俺。いじけたガキみたいな愚
痴吐いちやって。

そういうキャラじゃないだろ。こんなの、彼女だつて呆れちまう。

慌てて打ち消そうと口を開いたのだけれど――

「要らない子なんて……そんなことないです。少なくとも私は、婚約破棄を言い渡された時、リシャル様に救われたんですから」

「リシャル様はまさしく私の王子様ですよ」

まっすぐに目を見てそう言われた瞬間、俺は恋に落ちたのだ。

われながら笑っちゃうくらいチョロすぎる。

けれど俺はずっとそう言ってくれる人を、待っていたんだと思う。

『双子の片割れ』でも『優秀な兄のオマケ』でもない、俺自身を求めてくれる人を。

「ケツまんこも捨てがたいけど……今日はまんこに挿れようかな……」



体重を掛けて、彼女を押し倒す。

両ももを手で押し開くと、既に充血して膨らみきった膣唇が、物欲しそうにヒクついて蜜をたらたらとこぼしている。

「っは……♡もう準備万端だな。こんなの、挿れずに放り出したら生殺しじゃん？」

ぬち……ぬち……♡

ず……ぶううう……♡

「くく………♡♡♡あくく………♡♡」

そそり勃った肉棒を突き入れると、どろどろのまんこはあつという間に肉棒を呑み込んでしまった。

「……う……お……♡もう奥まで引きずり込まれてる……っ♡すげ

……積極的じゃん♡」

「っあ……は……や……あ……あ……っ♡」

柔らかく蕩けた膣襞は、好き好きっ♡とぴったり肉竿へすがりついてくる。

それを引き剥がすように腰を引き、暖機運転のように浅い抽送を繰り返す。

ず……りゅん♡ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡ぬぢゅ♡

恥骨辺りでゆるゆると抜き差しすると、焦れたように膣の入り口がひくひく♡する。

花芯を一枚一枚めくるように中を抉り込むと、ちゅっ♡ちゅっ♡と待ちわびていたかのように襞が肉竿へ吸い着く。

「は……っ……♡これ……兄貴のちんぽの形に馴染んじやってるな

……俺のちんぽの形……すぐに、思い出させてやるから……♡」

ぐつ、と腰を突き入れ、更に奥へと肉楔を打ち込もうとする。
と――

「……君。彼女がどこへ行つたか、知らないか？」
扉越しに、かすかなオリヴィエの声が聞こえる。

「……っ！」

ふやけきつた彼女の顔が、一瞬にしてこわばつた。

「……いえ、存じ上げませんが……」

緊張した声音の、使用人らしき男が答える。

「そうか、ありがとう。見つかったら知らせてくれ」
カツカツ、と踵を鳴らす音が遠ざかつていく。

彼女は身じろぎもせず、扉をじつと見つめている。

たったそれだけ。おそらく一分にも満たないやりとりで、俺がじつくり時間をかけて蕩かせた彼女の理性が、引き戻されてしまった。

「……兄貴にバレたらどうしようって、ビビってた？」

ベッドに両手をついて彼女を見下ろし、皮肉っぽく笑う。

彼女は視線を泳がせ、「……ごめんなさい」と呟いた。

「そんなに兄貴に義理立てしなくてもいいのに。……なあ、俺もアンタの婚約者なんだけど？」

「そう……ですけど……二人平等って約束は……崩したくなくて……」

「

「はいはい。真面目で素晴らしいちゅね♡子猫ちゃんは♡」

顎をつかんで上を向かせ、ちゅ♡ちゅ♡♡とヨダレまみれの唇へ吸い着く。

半開きの唇に舌を差しこみ、先っぽを丸めて水気の多い唾液が絡んだ彼女の舌の表面を撫で回す。

自分の唾液を流し込むと、ごくんと喉を鳴らして彼女が嚥下した。キスは好きだ。互いが混ざり合って融けてゆくようで。

口と性器、両方でセックスしてるみたいに感じられるから。

もつと深く繋がれたらいいのに。たとえば子宮をブチ抜いて、もつと奥の臓物に突き刺さるまでぐっぽり繋がって。

二度と引き抜けないくらいに、深く楔を打ち込んでしまえたら。

そうしたら、兄貴から完璧に彼女を奪えるのに。

ずぢゅ♡ずぢゅ♡ずぢゅ♡

膣壁にカ리를擦りつけ、クリ裏の膨らみをぞりぞり♡と撫でる。

「ひっ♡ひっ♡ひっ♡んっ♡あっ♡ふぁっ♡あぁっ♡」

現実引き戻されてこわばっていた彼女の頬が次第に緩み、快楽に蕩けたメスの顔へと再び戻ってゆく。

切っ先から染み出すカウパーを塗りつけるように、何度も何度も狭いストロークでしつこく膣襞を擦る。

「やつ♡そこお♡しっこ……いつ♡またっ♡しやせえしちゃうから
あぁ♡♡」

腰を振りたくって甘ったるい声でヨがる彼女。まるで盛りがついたメス犬だ。

（そうだ。それでいい。兄貴のコトなんて……さっさと忘れちまえよ……！）

吸盤でもついてるみたいになっちゃううぅと強く吸い着いてくる膣

褰を引きずるようにして、ペニスを膣口ギリギリまで引き抜き――

とちゅんっ♡

「………ッ♡♡♡あ………ッ♡」

俺の腹の下でびちびちっ♡と釣りたての魚みたいに彼女の身体が跳ねる。

柔らかな行き止まりを亀頭でとんっ♡とんっ♡とノックすると、

「ひぐう♡うっ♡うう♡あう♡あっ♡あっ♡」

切迫した声が半開きの唇から漏れ、涙に濡れた瞳がぼうつと俺を見上げている。

「やっとな俺のちんぽの形、思いだしてくれたみたいだな……♡しっかり上書きしてやるから……もう、忘れるなよ？」

狭いストロークで膣奥を叩く度に膣褰が波打ち、ぎくん♡ぎくん♡

と彼女の身体がわなないて悶絶する。

「つああ……っ♡ひっ♡んっ♡んっ♡んうううう……♡おぐう♡ぐりぐり♡♡やめれっ♡ふわふわっ♡きちやうからあああ♡」

歡喜の涙をぼろぼろとこぼし、命乞いするみたいに懇願する彼女が愛おしくてたまらない。

ずっとこうしていられたらいいのに。

彼女を快樂漬けにして、俺のちんぽのことしか考えられないように、なつてしまえばいいのに。

こちゅっ♡こちゅっ♡こちゅっ♡

性急に腰を揺らして子宮口の襪に亀頭を押しつけ、小刻みに揺さぶりをかける。

「………い………ッ♡あっ♡おっ♡えああ♡あっ♡はっ

♡
」

言葉すら紡げなくなり、獣じみたうめき声を上げてひたすらに快感を貪る。

ぐちゃぐちゃに蕩けきった胎内はぐねぐねとうねり、膨張する肉竿へ貪欲に吸い着いて収縮を繰り返す。

「♡♡♡もおお♡むりいい♡いつ♡ぐっ♡うぁ♡あ♡あゝゝ…

……ッ♡
」

俺の首にぎゅううううう♡つとしがみつぎ、足を反り返らせて彼女が絶頂に達する。

わななく膣壁に目一杯肉幹を締め上げられ、精液が精管を一気に這い上がって——爆ぜた。

どぶうううう♡どぶううううう♡びゅくっ♡びゅるううううう

ううううううううッ♡♡♡

「~~~~~ッ♡お……っ♡おお~~~~~ッ♡♡♡♡」

がくがくがくっ♡っ♡と彼女の全身がわななき、結合部からぷしゃあ
ああ♡とハメ潮がまき散らされた。

「すっげ……♡まんこがごくごく嬉しそうに精液飲み干してる……

♡」

「う……ああ♡あつい♡のっ♡どくどくっ♡しぎゅう♡に♡あ♡つ♡あ
ああ……ッ♡」

汗まみれの肌を擦り付けるように彼女にのし掛かって頭を抱え込み、
腰を押つけてパクパクと開閉する子宮口へ残滓を送り込む。

大きく尻を持ち上げられた彼女は俺の腰を両ももでぐっ、と挟み込
み、腰を震わせて吐精を受け入れていた。

「……っ……はぁ……♡はぁ……はぁ……♡もお……♡やりすぎ……
ですよ……っ♡」

くったり身体を横たえ、肩で荒い息をする彼女の頬をすりすり♡と
撫でる。

「……悪い。アンタが可愛すぎて、つい」

「……そうやってごまかそうだったって、そうはいきませんから」

ふい、とそっぽを向く彼女にぎゅううくと抱きつき、肩に唇を寄せ
る。

「俺はいつも本気だつてば、子猫ちゃん♡」

ちらりと俺を横目で睨み、彼女はため息をついた。

「……今回だけ、ですからね？」

「分かつてる……愛してるよ♡」

冗談めかして笑い、今度は頬に口づけた。

——深夜。皆が寝静まった頃。

俺はマントを羽織り、そつと寝室を出た。

音をたてないように廊下を歩き、手にした燭台の火を極限まで小さく絞って、隠し扉から上へ伸びる螺旋階段を昇り最上階へと向かう。

持っていた鍵を手に取り、鍵穴へ差し入れる。

昼間、司書のじいさんにワインを差し入れ、その場で軽く酒盛りをした。

じいさんが酒好きですぐ泥酔することは知っていたから。

案の定ぐうぐうびきをかいて寝てしまったので、腰にぶら下げていた鍵束から書庫の鍵をこっそり取り、ニセモノとすり替えておいたのだ。

すぐに返すつもりではあるけども……ちよつとだけ罪悪感で胸が疼く。

ぎい……と立て付けの悪い扉を開くと、法典や書類を開くための書見台をぐるりと囲むようにして、ブックスタンドに所狭しと本が並べられている。

だが、目的はここではない。素通りし、更に奥へと進んでゆく。

（今頃……兄貴とアイツが、セックスしてるんだろな）

昼間彼女の胎内に思うさま注ぎ込んでやったことを、兄貴は知らない。

それを思い出すと、少しでも溜飲が下がるけれど。
ただ、それだけだ。なんの解決にもなつてやしない。

「俺の日」なら、好きなだけ彼女を抱くことだつて出来る。
ルールを守つてさえいれば、何も問題は無い。

——でも、結局どこまでいっても彼女が俺だけのモノにならない
来だけは決まつていて。

それを思うと、胸がかきむしられそうに苦しい。

「兄貴の日」に兄貴と彼女がセックスしているのを盗み聞きしながら
オナニーしていると、虚しさだけが募る。

彼女を俺だけのモノにしたい。俺だけを見て欲しい。

叶わぬ願いだと分かっている——願わずにはいられない。

今までだったら他の女で発散していたと思う。でも、俺はもう彼女じゃなきゃダメなんだ。

来月には婚姻の儀が執り行われる。そうになると、本格的に子作りに突入する。

学園でクロフォード先生が彼女にかけた避妊魔法は、婚姻の儀で司祭によつて解除される。

そして——彼女との『初夜』を先に過ごすのは、兄貴と決まっている。

この国では一妻多夫制が許容されているが、どちらの子かをはっきりさせるため、二人の夫が一ヶ月交代でセックスに励むならわしにな

っている。

そして彼女が先に兄貴の子を妊娠してしまつたら――

その子が王位継承者となり、彼女は今後、ほとんどの時間を兄貴とその子供と過ごすことになる。

それは周囲が望んでいることだ。

両親も、側近や使用人も、おそらく民衆たちも。

『王の器』である兄貴と彼女に子を為して欲しいと願っている。

蚊帳の外の俺ができることなんて、何もない。

正当な手段を使つては、兄貴に勝てない。

――だから。

「……あつた」

書庫の最奥にある隠し扉。

いかにも禍々しいオーラが漂っていて、ぞわりと背筋が震える。

体重を掛けて隠し扉を押すと扉が滑るように開き、大人一人がようやく通れるほどの狭い空間が現れる。

部屋の中はがらんだった。

中央に置かれた台座の上に、一冊の本が鎮座している。

血で染めたような真紅の革でつくられた表紙には、茨の棘を模した突起をちりばめた鎖が蔦のように張り巡らされていて。

まるで手にとろうとするものを拒むかのようにだった。

——留学前につるんでいた、不良魔術師から聞いた噂話。

王城の奥に、禁呪が記された本があるらしい。

そこには、避妊魔法を書き換える裏技的な呪術も書かれていると。

「好きな女にかけちゃうヤツもいるのかな」

「そうなたらかなりヤバいな。イカれてる」

なんてその時は嗤ってたけど。

（まさか、自分がそのイカれたヤツになるとはね）

自嘲じみた笑いが漏れる。

こんな形でしか人を愛せないのか、俺は。

手を伸ばし、表紙の中央にある銀の茨に指を押し当てる。

「……ってー……」

鋭い痛みが走り、皮膚を薄く茨が切り裂く。

滴る血が茨に染みこんだ瞬間――

本が淡い光に包まれ、絡みついていた茨が生き物のようになると解けた。

「……よっし」

俺は本を手に取り、素早く懐にしまう。

これだけ嚴重に保管されている書物だ。相当にヤバい魔術が記載されているであろうことは明白だ。

でも、俺にはもう、これしか手立てはない。相応の代償を持つて行かれることも、覚悟の上だ。

（いいさ。彼女を手に入れられるなら、手足の一本くらいくれてやるよ）